

田邊先生と片山先生を送る

加藤林太郎

1

田邊純夫先生と片山正樹先生が、1997年3月をもって定年を迎えて退任されることとなった。御在職の期間は田邊先生が42年、片山先生は40年の長きにわたり、本学のフランス文学科が創設されてからでも34年間お世話になったことになる。

フランス文学科の創設は、学院内外の御厚意があったのは勿論であるが、京都大学を定年退官されて本学へ見えることになった伊吹武彦先生、関西大学から見えた高塚洋太郎先生、そして田邊、片山両先生の御尽力によるものであった。ほぼ同じ頃、あちらこちらの大学の文学部にフランス文学科が新設される動きが見られた。終戦後、学生の外国語履修状況に変化が起こった。フランス語を学ぼうという学生が増大し、もちろんフランス文学の人気も復興して、外国文学のフロントを占めるに至った。そして1950年代には、「フランス文学が第二の国文学の観のある、フランス好きのわが国の読書界」という感想も述べられる時代になったのである。そのような状況が続く中で我がフランス文学科も発足したのであった。

2

その頃、即ち1960年代の前半には、田邊先生はユゴーの研究を進めておられた。御研究は講義にも自然反映し、学科初期の卒業生にはユゴー通が多いと聞

いている。これに先立つ50年代には、シュペルヴィエルやジャムなど20世紀初期の詩人をとり上げ、作者が独自の詩境をいつ見いだしたかを論じておられる。60年代以降はラルマティエヌを経て、ロマン派作家の研究へ向かわれた。「ヴィクトル・ユゴーと『九十三年』」（1961）では亡命とそれに続くコミュニケーションを経験した後のユゴーの政治思想のあり方が考察されている。「"Actes et Paroles" における政治思想」（1965）では、ユゴーの政治思想はむしろ使徒意識の強い予言に近いものであることなど、政治思想家としてのユゴーの限界が考察されているが、そこにこそ表れているロマン派作家の特徴について大いに教えらるる論文である。

1960年代後半のお仕事はヴィニィの研究である。「ヴィニィの『牧人の家』について」（1966）は、ヴィニィ独特の孤独感が考察された後、黄金の世紀を過去に求め、現代と未来を墮落の坂道と見る思想に反して、ユゴーとともに光明と統合の時を未来へ託する詩人の姿が示されている。「ヴィニィの小説『ダフネ』について」（1972）では、象牙の塔の詩人という評価にもかかわらず、信仰の問題を自己内面の問題としてよりはむしろ社会の過去・現在・未来の問題として危機的に考えたヴィニィが考察され、その文学上の表現が背教皇帝ジュリアンの最後を主題とした哲学的歴史小説『ダフネ』であると位置づけられている。この論文によって19世紀における背教者ユリアヌスの主題の人気とその理由を教えられた。

先生の御研究は、1970年代は19世紀初期の神秘思想家で、レカミエ夫人の賛美者として知られるピエール＝シモン・バランシュに向けられている。「ピエール＝シモン・バランシュ — 浪漫主義時代の conciliateur —」（1973）と「バランシュにおける浪漫主義」（1980）では、伝統と革新、宗教と理性など、対立する双方に人間にとっての必要性を認め、矛盾相克するものの総合を摂理史観と進歩の観念に求めた夢想が分析される。これを通して、ヴィコの影響を受け、サン＝シモン、ド・メーストル、ユゴー、ヴィニィに影響を与えたこの神秘思想家に光が当てられる。王政復古時代の文学者・思想家のバランシュを、社会の革

新に反対する反動家ではなく、伝統と革新の融合を人類史の一ページとして現代を考える思想の持ち主として解明した重要論文であると思う。

1980年代以降はゾラの研究を続けておられる。「形成期のエミール・ゾラ」（1986-89）は、ゴンクール『ジェルミニイ・ラセルトゥー』にカブけられ、『テレーズ・ラカン』を執筆するまでの若き日のゾラが理論的、実作的に修行を積んで、独自の小説世界を創り出すに至るまでを、テーヌやシャンフルーリの理論、『クロードの告白』や『マルセユの秘密』などの初期作品を通して考察したものであって、ゾラの理論と実作の一致が実現し、自然主義作家の自覚の第一歩となる様子が手にとるように分かる。「『居酒屋』の資料としての『ル・シュブリーム』」（1990）および「ゾラの『居酒屋』についての一考察」（1991）ではともに、労働者から身を起こして工場主になったドゥニ・プーローが労働者の実態を報告した『ル・シュブリーム』の重要性が指摘されている。この書は『居酒屋』の作者に大いに役立ち、剽窃呼ばわりまでされたほどであって、ゾラが『居酒屋』において他の追随を許さぬほど力強く、荒々しい「真実」を描けたのは、この書と出会ったことによるということが指摘されている。先生のこの論文が発表された同じ年に岩波文庫から『崇高なる者』という表題で見富尚人氏の訳書があらわれたのは印象深いことであった。「ゾラが定義した自然主義」（1994）においては、自然主義の名においてゾラが主張したことに今一度立ち戻って考えてみねばならないとされている。自然主義という語のカテゴリーはゾラの判断次第であって、ゾラひとりの自然主義である。ゾラの自然主義理論は、作家は現実の単なる書記であるべきだという主張と、芸術家は現実を自分の体質に従わせるべきだという主張、この二つの主張の間を振り子のように往き来しながら述べられていることが明らかにされている。ゾラは内部の自然という観念でもってこの理論上の矛盾を克服したのである。

田邊先生の御研究においては、作家の理論の考察が大きな比重を占めているが、その理論の解明に当たっては、作家を取りまく歴史的・社会的情勢も、作

家の資質と密接に関連づけて述べられているため、当時の政治・社会の動向のひとつひとつが、「外部」のこととは思えない内面性を帯びて認識されるのである。これは先生の研究のあり方から来るのであるけれども、「ヴィクトル・ユゴー《ウィリアム・シェクスピア》について」（1964）「ヴィニィの『牧人の家』について」「バランシュにおける浪漫主義」などでこれも私が学べるものなら学びたいと思う事は、各論文において、作家それぞれの主観的かつ執拗な錯綜した議論を見事に分析しておられることであった。「ロマン主義」を昭和初期までよく書かれたように「浪漫主義」と先生は書かれる傾向もかつてあったが、これもなつかしく思い出すにちがいない。

3

片山先生の御研究の意図はやはり先生の言葉から借りて「再検討」と「復権」の二語によって要約されるのだらうと思う。後に先生の研究の主方向は小説史へと向かうのであるが、1950年代には「ノワイユ伯爵夫人」（1957）がある。ルイズ・ラベよりヴァルモールを経てフランス文学における情熱の女流詩人の系譜はノワイユ夫人において完成したが、その詩の主題は決定的に彼女そのものであったと結論されている。先生には詩人に関する研究がその後も続いており、「享受者に対する文学の「抵抗」—サン=ジョン・ペルス『流謫』考一」（1973）もそうである。19世紀までの安易な理解を許す文学に対立する現代の高級・難解な文学の代表としてサン=ジョン・ペルスの『流謫』が考察されている。詩人を取り巻いていた世界情勢を読み取ると同時に、深読みや日常的解釈排斥の危機も指摘されており、詩のリズムについても解説されている。先生には季刊詩誌「無限」に発表された論文「サン=ジョン・ペルス『流謫』の分析」（1964）もある。《Euvres de Maurice Magre, poète oublié》（1990）には、戦前に活躍した詩人マーグルの全著作リストが載せられていて、これは世界初の試みである。先生は「不当に忘却された文学者」と述べておられる

が、私などが、そんなに忘却されていないように感じるのは、仏文科の学生が編集した研究誌「みしゅまん」に先生がマーグルの詩を訳載されたことなどがあるため、思い違いを起こしているのであろうか。

従って時に忘却と見るべきなのか否か判断に困るところであるのだが、「ウージェーヌ・シューの海洋小説」（1960）はどうであろうか。『パリの秘密』のウージェーヌ・シューはまたフランスにおける海洋小説の創始者でもあって、『アートル=ギュル』は黒人奴隷の復讐物語を本筋とする海洋活劇である。主要登場人物も舞台も次々と移動する新しい手法が開拓されているだけでなく、その汎サディズムとも言うべき特徴は近年新しく脚光を浴びている。この作家がデュマよりも軽視されているのは不当だとする論である。しかし「サンチヌの『ピッチオラ』— フランス・ロマン派の小さな花 —」（1960）はたしかに「復権」と呼べるものである。ナポレオン時代、牢獄にある政治犯が一本の花を愛することによって、人間らしい感情を保ち続けたという牢獄小説の異色作。当時ベスト・セラーとなって各国語に翻訳された。

文学史における「忘却」ということが起こるのは恐らく、その作品が何らかの流派に属さず孤立した現象のようにみなされることによってであろう。「メロドラマ小論 — 大革命とロマン派をつなぐ文学の一面 —」（1965-66）に与えられている副題によってその事実が推測される。そしてピクセレールのメロドラマが与えた影響は確かに一作家一作品の規模を越えた「現象」と呼んでいいものであったと思われる。同論文は、革命時代とともに生まれ、19世紀の始め20年間を風靡した演劇、メロドラマの発生原理の探求とその大成者ピクセレールの再認識を目的とし、運命に翻弄されながら乱世を巧みに遊泳したピクセレールの波乱の生涯が紹介されている。現代では忘れられている往年の大劇作家を復権させる野心的な研究である。このピクセレールの故郷はフランス北東部の古都ナンシーであるが、ここで折しも開催された演劇祭に参加する本学の劇団の代表として、先生は学生達とともに乗りこまれたのだった。これが「メロドラマティック」でなくて何であろう。「メロドラマ」という名称

を最初に用いたジャン=ジャック・ルソーの『ピグマリオン』を分析し、主題的、形態的にこの作品がその名称にもかかわらず後代のメロドラマとは関係がうすいことを論じた「ジャン=ジャック・ルソーの『ピグマリオン』—「メロドラマ小論」余録その1—」（1967）も併せ読むべきものである。

「ヴィドック研究（一）— 序言と年譜」（1967）も復権の系列に入る研究である。徒刑囚、脱獄王、スパイ、保安警察の長官であり、近代捜査技術の考案者であったばかりか、ジャン・ヴァルジャンやヴォートルンのモデルとして文学史に不朽の名を残した怪人物の紹介と詳しい年譜から成っている。「デュラス夫人の『ウーリカ』」（1984）は、ある黒人女性の一生涯とその秘めた恋の物語の研究。発表当時は国内外で大変な評判を得たこの小傑作を再評価する論文である。研究と並行して先生は雑誌「海浪」に『ウーリカ』の全訳を連載された。

先生が特に意欲を以て取り組んで来られたのはブークレールの再評価であろう。論文としては「アンドレ・ブークレールとジャン・コクトー — 注目すべき作家と贈られた未完の詩 —」（1989）と《*André Beucler aux origines de la modernité narrative*》（1994）その他をあげることができる。両大戦間の不当に無視された作家アンドレ・ブークレールを作品 *La Ville anonyme* を中心に再評価した論文である。「西欧の没落」後の新しい世界を描こうとした最初の小説とされ、フランス語の格調と抑制を示すすぐれた文体を有し、小説と詩の境界が消滅したと評されている。同じころフランス本国でもこの作家の再評価の動きが起こり、先生は、1994年にアンドレ・ブークレール論集に執筆しておられる。先生は生前のこの作家と親しく、ジャン・コクトーから贈られた詩はブークレールの遺族から提供されたものである。Claude Confortès に関する論文（1995）には、68年演劇のノン・コンフォルミズムを継承し、非人間的メディアに対抗して、真の人民性を目指す演出家が紹介されており、新しいフランス現代作家の真価を認めさせる努力を続けておられる。

片山先生の御訳業を紹介すれば数多いのであるが、そのうちから二篇のみを

とり上げさせていただく。中央公論社《世界の文学》第52巻ヴァレリー・ラルポー『恋人よ 幸せな恋人よ』（1966）は、1971年に鈴木、柳瀬両氏によって訳された、エドゥアール・デュジャルダンの『もう森へなんか行かない』が本邦初訳であるならば、フランス文学における「内的独白」の翻訳としては、まさに初訳であったのではないか。先生がお持ちのもの以外の版も探すということで滞仏中の私が B. N.へおもむいたのを思い出す。もう一つ今度はフランス語からでない訳書をあげることにする。それは筑摩叢書（258）リットン・ストレイチー『フランス文学道しるべ』である。この書の翻訳は先生が学生時代に着手されたものだそうだが、たいへんに面白い。読んでいて吹き出しそうになった名訳もある。ストレイチーは仏文学通でもあるが、伝記家としては辛辣な作家である。ことによるとその点あたりに片山先生とどこか通じるところがあったのではなかろうか。

先生は1975年にフランス政府から *La Croix d'Officier de l'Ordre de l'Education artistique, Ordre international des Arts* を受けられた。

4

田邊先生にも片山先生にも、書かれたものがまだまだあるのに、自分の好きなものだけをとりあげてしまった気がする。また、それが、どのように書かれているのかも引用を以て示すべきであったのだ。

ある週刊誌の対談の中で次のようなやりとりを目にした。「翻訳書に限らず難解な文章は、自信がない証拠だと思う。誤魔化したいから難解にしている。本当に伝えたいなら難しく書く必要はないんです。」—「分かりやすく書くと自分の知能程度を疑われると思っている人が多いですよ。」—「仏文系の人に多いんじゃないですか（笑）。」果たしてここで言う「仏文系の人」が、対談者の言うような理由でそうなっているかは疑問だし、また一般的に真実かどうか分からない。しかし少なくとも、我がフランス文学科に学んだ研究者な

らば、その受けた教育の質からして、ここで「笑」われねばならない人はいないはずである。

さてところで、田邊先生は大の山好きであり、スキー愛好家でもあったので、先生に山へ連れて行ってもらった卒業生は多いと思う。私自身にとってはしかし先生は「写真道」の師であったといえる。学生時代から持っていた蛇腹式の旧式カメラが留学に当たって自動化したカメラに進歩したのは田邊先生のおかげである。学内カメラ・サークルの代表をしておられた先生は、ところが意外にも「反自動」主義者で、モノクロ・フィルムに露出計、距離は目測の方式を好んでおられたと思う。私はといえばズーム付き一眼レフからUターン、どんどん簡便機へと墮落し、ついには「写ルンです」の愛用者におさまっているが、不肖の弟子とはこのことであろう。

片山先生は故中川努先生が仏文研究室へ登場されるまでは仏文研究室の「理工学担当」であった。研究室の機械化・電子化は半ば以上片山先生の指導によるものである。私が古き良き「電蓄」に別れを告げ「コンボ」を前にすることに決めた時には片山先生に相談したのだった。「その予算では…」とおっしゃったが、使ってみれば思いのほか良いもので、当時のアンプはじめ全点健在、大いにオーディオライフを楽しんで来た。

あの1963年4月に我がフランス文学科第一回入学生を迎えて教壇に立たれたお二人の先生をお見送りする今、フランス文学科の青春時代の思い出そのものを見送るような気持ちになってしまう。田邊先生、片山先生、長い間どうも有難うございました。先生の研究と教育の生活がますます快調に続くことを希望しております。

(文学部教授)